
武紋戦記

反自律(= ` ' =)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武紋戦記

【Zコード】

Z5617Z

【作者名】

反自律(=、=、=)

【あらすじ】

諸王国連合盟主国王都に、突如、王命により不可解な魔法実験の告知が発布される。

身分も専攻学科にも一貫性がない王立学院の学生たちを集めて、なんらかの魔法実験を行うというのだ。

その実験とは、ある種のマジック・アイテムの性能を測ることを目的としていたが、実質的には学生たちが最後の一人になるまで戦い合うことを強いるものだった。

様々な背景や思惑を抱えた学生たちによるバトルロワイヤルが、

今、
始まる。

序 発端

一連の騒動は、「魔法塔」内で発見された不可解な術式群について国王に向け報告されたことからはじまつた。少なくとも、表向きの書面には、そうに記録されている。

ただし、物事には正規の記録からは漏れる子細といつものもある。そもそもの発端について補足するならば、のちに「武紋」と呼称されることになる複合型積層術紋式を不自然な状況で魔法学科の若き碩学が不自然な状況で「発見した」ときから……さらに遡れば、その「武紋」を何者かが用意したところが……そもそもの発端、なのかもしれない。

が……この事件が王都全体を揺るがすほどおおいとになつてしまつた一番の原因是、本来ならば興味を示すべきではない瑣事に為政者たる盟主国王が興味をおしめしになつたことにある……といふことに、衆田の意見は一致している。

つまり、盟主国王がむやみに煽るような布告をださなければ、あのような結果にはならなかつたであろう……と。

この事案は、多忙な盟主国王のこと、通田恒例の御前会議にて、前後に雑多な決済事項や報告を挟みながら「その他の煩雜事」として形式的に奏上され、国王の耳に入れられたにすぎない。

陪臣たちは、てっきり国王もこの報告を聞き流し、スルーして終えることだらう、と、予想していた。はつきりいつて、他にも急を要する案件はいくらでもあり、山積みとなつていて。

だが、盟主国王は……より、正確に彼のお方の肩書きを記述するなら、「諸王国連合盟主国王」、といふことになる。あえて俗ないいかたをするのなら、二代前にこの大陸の大半を併呑した霸王の孫、だ。

変事ではあっても国政になんらかかわりのないこの報告にいたく興味をしめし、きわめて異例のことながら、その発見者を御前に召

しあげ、その口からじかに話を聞いたい……と、その場で仰せになられた。

御前会議で盟主国王が発する言葉は、むろんのこと軽んじられることはない。もつと端的にいって、かなりの強制力をもつ。

その強制力の前では、発見者がまだ年若いこと、それに、彼のものが被差別民族の出身であることなどはささいな問題とみなされ、早急に召したてられることになった。

「……その日、わたくしは、いつものように「魔法塔の奥深く、埃みまみれた未整理の書棚から、研究すべき資料を探していました。それが、学徒としてのわたくしの仕事だったからです」

御前に召し出されたリツ・リロンは、平伏をしながら淡々とした口調で報告をする。

「すると、書棚の奥から、わたくしを呼ぶような声がいたします。耳に聞こえる声ではなく、頭の奥に響くような声が。

研究者としての勘、といいましょうか、それとも、そのときにつて、太古のマジック・アイテムがわたくしを招きましたのでしょうか。

わたくしは、その声に導かれるままに奥へと、普段、踏み入れない領域へと進み、そこで……熒光を放つ箱を、書棚の中にみつけました。

これも、実際に光を放っていたわけではなく、その箱だけがわたくしの視界のなかで、ひときわ明瞭に迫ってきた、ということです。わたくしは、魅入られたようにその箱に近寄つていき、箱を手にし、中をたしかめました……

箱の中には……リツが知らない複雑な術式が記されたカードが、何枚か、納められていた。ちいさな箱、ではあつたが、なんとも名状のしがたい魔力を放つている。まだ一学徒の身であるリツにしても、その来歴不明のアイテムがどうやら自分ひとりの手には余る代物だ、ということについては、瞬時に判断を下せた。

そこでリツィはその足で術式が記されたカードを魔法塔上層部に提出し、魔法塔上層部はひととおり調査した後、すぐさま国王府に提出した。

「このフリットが王都になつたのは、たかだかこの四十年。フリットの都自体は、四百年以上の歴史を誇り、魔法塔は、そのフリットの都よりもさらに古い。王都となる前のフリットの都は、魔法使いが集う土地として有名だつた。

どんなお宝が埋もれていても、不思議じゃあないさね」

そう解説するのは、同席していた魔法塔最高責任者と王立学院長を兼任する通称「不眠の魔女」、ニッターッタ・タン師だ。発見者のリツィは王立学院の学生、それも、魔法学部に所属している関係で、呼ばれたわけでもないのに魔法学部の責任者として同行してきた、形になる。研究一辺倒で「引きこもりの魔女」との異名もあるニッターッタ・タン師が魔法塔から出ることと血体、きわめて異例のことといつていい。

学生として魔法塔の庇護下にあるリツィの身を案じて……というよりは、王宮から魔法塔へ干渉される口実を与えることのなによう奉制にきた……と、考えるのが、妥当であろう。

「術式としては、ひどく手が混んでいるが……いいかえれば、ただそれだけの代物だ。

費用と人手を惜しまなければ現代の技術でも再現できるし、学術的な価値はほとんどない。

問題は、こんなけつたいな代物が、なぜ今まで発見されなかつたのか……つてことなんだが……」

魔法塔の地下迷宮ならともかく、地上階にある書庫、中でも、リツィのよつな学生が立ち入ることができ「浅い」領域に何があるのかは……多少、整理が行き届かない部分はあるにせよ、だいたいのところは判然としている。

そんな場所に、本物の「お宝」がころがっているわけがない。つまり、この術式が発見された状況はきわめて不自然といえた。

何者かが、何らかの意図を持つて、わざわざ「発見をせるために」そこに置いた……と見るのが、妥当だった。
「なあに、多少不確かなところがあつても、実際に使ってみりやあええがね。

正規の軍人や役人を使うのが怖い「うんなら、学術実験」と「こ」とにして適当な学生にやらせりやええ。

過分な恩賞も用意すりや、「どこからも文句はでこねえでよ」
盟主国王は鷹揚にうなずいて、その場ですらすらと「実験動物」のリストを書きはじめた。

後に役所の書類に記載される「正規な記録」から漏れるであろう子細を補つのならば、「事の発端」は以上の次第となる。

開戦（一）

バイトからの帰り道、紺染めの腹巻きに袖なしの上着、脚半、足袋、といった飛脚姿のヤバネ・ジュー口は、王立学院正門前の目抜き通りで立て札の前に人だかりが出来てているのをみつけた。立て札になんらかの公示がなされているらしかったが、距離と人垣にはばまれて文面までは確認できない。

仕事かえりでもあり、正直、人混みをかきわけてまで文面を確認するのも面倒にかんじたが、そのまま脇目もふらずに素通りするには、このヤバネという若者の好奇心はいささか強すぎた。この公示、不自然な点、不審に思える点が多くあり、おまけに、何やら「いやな予感」もする。

学院正門前、という場所も、奇妙ではあった。

学生向けの公示なら、校内に専用の掲示板がある。それに、競うようにして公示の内容を読んでいる群衆の中には、職人風やら商人風やら、明らかに学生ではないものも多い。

これだけの多くの人の興味を引き付ける公示、とはいつたいなんであろうか？

疑問に感じたヤバネは、人込みを搔きわけて公示を読んでみると、

とにした。

「……王府の発布、だつて？」

真っ先に目立つ印字に気がつき、ヤバネは軽く眉をひそめてひとりごちる。

「旦那、字が読めるんですかい？」

たまたま横にいた職人風の男が、ヤバネに声をかけてきた。王都の民の識字率は、さほど高くはない。立て札の前にあつまつたこの群衆も、とともに内容を読める者は、四人に一人いればいいほうだろ？

「ああ。

今はバイトの帰りだからこゝんななりしてこぬけび、おれも一応学生だし。

よつするに学生の呼びだしらしきけど……王府の印があるのが、ビーにも解せねーな……。

まあ、いいか。読んでみるぞ

ヤバネは布告文にやれりと田を走らせながら軽く答え、周囲の者にも聞こえやすいよう、若干、声をおおきめにして読み上げていく。

「……ええつと……。

王の如におこし、以下の学生に魔法学術実験の協力を求めるものである。

基礎物理学部学生 シャルアリアラ・シャルファフィアナ

統治理論学部学生 ズジヤルア・ダズルダッター

古典王朝詩学部学生 ヤバネ・ジユーロ

経済学部学生 ダウド・ドウナ

宗教史学部学生 ユン・ティ

理論魔法学部学生 リツツ・リロン

以上の学生諸氏は、速やかに学生課事務局に出頭する」と、ひととおり読み上げてから、ヤバネは声を低くしてひと口こちた。
「……文面でいやあ、魔法の実験をするからそれに必要な学生を呼び集めてこるようなんだが……にしても、なんなんだ、この一貫性のなさは……。

魔法学の実験だつてえのにまるで関係のない学部の学生を無節操によんてるし……学長はともかく、国王府の印までおしてある大仰さがどうにもげせねえ……」

まず、「学術実験」に「王命」が使用されることだが、異例だし異様だ。

「おまけに、シャルアリアラ・シャルファフィアナつていつたら田

帝国の忘れ形見だし、ズジヤルア・ダズルダッターつていつたらダズルダッター王家の三男坊だ。

どちらも、たかだか魔法実験のためにおいそれと呼びつけられるほどの軽輩でもねえ」

この一人は、学院内でも有名人であり、同じ学生であるヤバネも名前くらいはきいたことがある。ヤバネに限らず学院に入りする者なら誰もがその存在を知っている、セレブなのである。

四十年前に「諸王国連合盟主国国王」と霸権を競い、結果、敗れた「帝国」の忘れ形見や、諸王国の中でも五指に入る権勢を誇るダズルダッター王室の子弟が、下級貴族や平民といつしょくたに「学生」でいられることが、「王立学院」の大きな特色でもあるのだが……。

「……それに、ヤバネ・ジユーロつてのは、古典王朝詩学を専攻しているんだぜ？ まつたく、畠違いもいいところだ。

なんだって魔法学の実験に、かび臭い詩の研究をしている文系学生が呼び出されるんだか。

経済学や宗教史学の学生呼んで、いつたいなんの魔法実験おつぱじめるつてんだか……」

続けてヤバネは、もぞもぞと小声でぼやく。

ダウド・ドウナ、コン・ティ、リツツ・リロンの三名には、聞き覚えがない。

語感からいって、ダウド・ドウナは北方の、コン・ティは南方の名前に思える。リツツ・リロンにいたつては……流浪の民、フエンリン族の名に思えた。

「……身分も学部も違う学生を集めて、いつたいなんの実験をしようつてんだか……」

「旦那、詳しいんですね」

先ほど声をかけてきた職人風の男が、再びヤバネに声をかけてきた。

「一応、こここの学生だからな。学内の有名人の名前くらいは知つて

いる。

学部も違うし、直接、面識があるわけでもないんだけどな……」

「……身分以外にも……」

不意に、話に割り込んで来た者がいた。

体のラインが判然としない、ゆつたりとした西方風の民族衣装に身を包み、顔の下半分を覆い隠すフードを纏っているが……声から判断するに、女だ。

フードに隠れていない双眸は切れ長で、鋭い眼光を放つてヤバネの眼線を凝つととらえている。

そして、女にしては、長身だった。周囲の群衆と比較しても、目線の位置が高い。背の高さは、ヤバネとをして変わらない。

「……シャルアリアラ・シャルファファニアナビズジャルア・ダズルダッターは、みなみなみならぬ武術の素養があると聞く。

確とはいきれぬが、おそらく、ヤバネ・ジユーロも、なにしろ、あのジユーロ家の跡取りだという話しだ。

風評こそ聞こえないが、なにもない……ということ、なからう明かに、飛脚姿の男、ヤバネ・ジユーロに向かって、語りかけていた。

「ヤバネ・ジユーロはともかく……あとのおふたかたは、高貴な身分でござりますからね。

貴族のたしなみとして、乗馬、騎射、槍術に剣術くらいは軽く身につけておいででしよう」

ヤバネも、その女から目を逸らさずに、慎重な口ぶりで答えた。「これは老婆心でいうのだが、一刻でも早く学生課に出頭するがいいぞ、ヤバネ・ジユーロ殿。

実験は、もう始まっている」

民族衣装の女が、片手を掲げる。

その手に、唐突に、長柄の槍が出現した。

人の身長よりも長い柄の先に、両刃の穂先がついている。殺傷能力を持つた、「武器」だった。少なくとも、人が多い往来で振りかざすのに似つかわしい代物ではない。

立て札の周囲に密集していた群衆が悲鳴をあげつつ、蜘蛛の子を散らすように、わっとその女から離はじめた。

「……やつぱり、シャルアリアラ・シャルファファニアナ様かよ」

飛脚姿のヤバネは、槍を持った女から目を離さずに、後ろに飛んで間合いを取る。

間合いを取りつつ、素早く冷静に周囲を見回す。

口々に悲鳴をあげつつ槍を持った女から遠ざかって群衆は、今度は遠目にこちらの様子を伺っていた。

直接被害にあいたくはないが、遠目からは見物してみたい、とうことらしい。

こんな時だというのに、まったく、王都の民は物見高い。ヤバネとシャルアリアラの二人を中心として、ぽつかりと円形の空き地ができる、その周囲を有象無象の群衆が取り囲んでいる……という形だ。

「前帝国の皇女様が天下の往来で凶器を振り回すなんて、正氣の沙汰ではないですぜ」

ヤバネが緊張感にかける口ぶりで声をかけた。

「シャルと呼ぶがいい。長くて呼びにくかろう」

槍を持った女は、飛脚姿の男にいった。

「それにも、貴公。丸腰なのに逃げないのだな。よほど腕に覚えがあるのか、それとも、底の抜けたお人よしか……」

「そういうた女の目が、笑っている。

「いやあ、実は腰が抜ける寸前で、足腰が思うように動かないもんで……」

ヤバネは、ことさらに軽口を叩く。

「貴公。まだ武紋を受けとつていなかつたな。

そういえば、武紋を受け取る前の学生を倒したときの扱いは、聞いていなかつた

いいながら、女は、飛脚姿の男に、槍の切つ先を向けた。

「まあいい。

ことによると、それで失格になるかもしれないが、それもまた一興。

覚悟せよ、ヤバネ・ジュー口殿！」

「ま、待つたつ！」

遠巻きにしていた群衆の中から、大柄な男が転がり出でてきた。

「こ、この人は、まだ、武紋、受け取つてない。
じ、実験の意味、ない……。

け、経済学部学生、ダウド・ドウナ。た、楯の武紋」

大柄な男が前に腕を突き出すと……忽然とその手に、大きな楯が現れる。

シャルアリアラが槍を出したときと同じ、「唐突さ」だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5617z/>

武紋戦記

2011年12月20日21時48分発行